

6. 半鐘がなる！

飯田市川路中学校二年 M・H

「カーン、カーン」と半鐘がなる。二十八日午前三時頃、母が、

「M や早く N たちを連れ来て、新屋へ逃げな。」

と言つて、雨靴をさがしだし、履物はあちこちに散らばつて、水はもう家の中へ入りそうだ。私も手伝わして荷物を上げなくともいいだろうかと思つたが、

「あぶないで早くきな。」

と叫ぶ母の声の水音にまじつてヒギレヒギレに聞こえる。私たちが心配させないようにと、母の気持ちのたろ。表へ出たらもうひびきの所まで水がついて来ている。父や母は水の増し具合、雨の降る量などを、疲れている中でみているのでしよう。

あまぐつをぬいで三人一つの傘で新屋までいった。

「おばさん、水がついて来て逃げたぞ、おらしま。」

「さあ、早くこれですをふいてあがつておいな。」

「いって、ぼろ布を出してくれな。」

あがつまし、ぼろ布を二枚の音を聞いていたが、こんな時にあつたかい言葉を一つかけまくれるだけども、人の情というものが、本當にうれしかった。おばさん

「ねえいな。」

と言つて布団を敷いてくれたので、妹たちは敷いてくれた布団へ、私は A ちゃんとならんでねた。A ちゃんは去年の十月生れた赤ん坊だ。とて可愛い子だ。A ちゃんの寝顔をみていたら、なにもなやみや悲しみはなく、幸福ぞりな顔で寝ている。いいなあ A ちゃんは、と思つた。おばあちやもきた。つうちむもうだめだ。流れましまう。レレため息をつく。

息を吸えばため息ばかり出る。私もなんだかさみしくなつた。家の中を本流が流れているのだ。そして豚が五匹ばかりたすかただけ、あとはみんな流水でしまつたと言つた。私は家がどうなつたのか、おかあちや達は死にやせんかと心配でたまらなかつた。

朝になりだいが人の声をするようになった。大勢の人が、

「初瀬屋があぶない。レレレいっまさわいでいる。」
 「ザアザアザアと音をたたく、竹をかついで走る人もいる。たわら、かますなびをかっいで歩いていく。私は障子の穴からぞれをみまいた。家の少し下の方は、屋根だけ出ている家が六軒もあった。白っぽく濁つた水で湖水みたいだ。おばさんの話だと、B 組の N さんの家は屋根まで水がついて、

「助けろ下さい。S・L」

と旗に書いて立てていて、警察のボートにきまもらつて逃げたぞうだ。F さんの方は家がつぶれたのうわさだが、どうしていろだろうか。友達の話が急に心配になつてきた。皆んな無事だといふんだけれび。

あの大水は悪魔だ。人を苦しめる悪魔だと思つて、こんな人の苦しみをなく

すには、高い屋根まである様な堤防を作らなければ、どして、家のない人たち、あつても住めない人に家を建つてもらいたいと思つた。キヤラメルの箱が落ちていれば、中身があるかどうかとり合ひをするという。私はこんな所まで人間をつきおとした悪魔がにくらしくつたまらなない。

これから庭の泥出したが、耕うん機もオートバイも自転車も泥に埋つていた。泥と水と汗と悪臭の中で、みんなが力の限り働いた。しかし、雨足は激しく降り続ける。タヤみの中に天竜川、久米川はゴーゴーとものすごい音をたてて流木や石が流れ、大きくうねつていて、水は更に増しどうだ。母に言われ花御所へ行つたら、おばさんが、

「早くぬいでお風呂に入りな。」と言つたので入つた。

でもから牛乳をしぼるのを見ました。

「助けろえ、助けろえ。」

と女の人の声が家の方でするので、母じやあないかと心配でならなかつた。

「ぞんたに心配なら、おばさんが千伝に行つてやるは。」と云つたので、

「おねがいます。」と云つた。「ちやが、

「僕がいくもの。」と云つたら、

「「ちや」はみんなといつしよに家においな。」と云つて出ていった。

不安と恐怖の一夜はあけた。若無事であつた。家へ行つたら畳の上を水が通つていた。家の横はなれの方、お蔵の方から水がびんびん入つていた。畳を流つては二階へ二十七枚上げました。後は上げられなかつたので、外へつんで

おいた。

家のあれから約二ヶ月たちましました。一日一日と復旧工事は進んでいく様ですが、
みなさんが安らかに眠れる夜にしま下さい。ご飯もおいしくあります。

(三十六年)